

ラークスパーの無摘心栽培における栽植密度

1. はじめに

本県におけるラークスパーの主要作型は、秋定植の促成栽培であり、1株あたり複数の切り花を得るため、摘心を行っています。一方、ラークスパーは、種子が安価で自家育苗が容易です。そのため、自家育苗苗を用いた無摘心栽培による短期作型が有利と思われます。ここでは、無摘心栽培における栽植密度について行った試験を紹介します。

2. 試験方法

供試品種は、スプレータイプとして、「ブルーグラウンド」、1本立ちタイプとして「ジャイアントインペリアルブルースパイヤー」（以下ブルースパイヤー）の2品種で、4条植え（株間20cm×条間20cm）、5条植え（株間15cm×条間15cm）、6条植え（株間12cm×条間12cm）の3水準を設定しました。

は種は200穴セルトレイに10月20日、10日間10℃の冷蔵庫で催芽、13℃ガラス温室で50日間育苗、定植は12月20日、施肥は基肥のみ緩効性複合肥料（N:P₂O₅:K₂O=10:10:10）により成分量7kg/10a、加温は13℃で行い、日長延長法で16時間日長としました。

3. 試験結果

両品種とも、栽植密度の影響は切り花日及

び節数には認められませんでした。また、切り花長は、全ての試験区で出荷に十分な長さとなりました。切り花重及び分枝数は、栽植密度が粗い4条植え区で多く、密になるほど少なくなる傾向が認められました。

花数は、「ブルーグラウンド」では分枝の着花数も調査したため、分枝数の少ない6条植え区で劣りましたが、「ブルースパイヤー」では、試験区間での差が認められませんでした。

以上の結果から、スプレータイプの品種では、分枝を低階級の切り花として出荷する場合は、切り花重、分枝数及び花数の優れる4条植えが5及び6条植えより適すと考えられ、1本切りする場合及び1本立ちタイプの品種では、6条植えでも十分な品質の切り花が得られることから、施設利用効率も考慮して6条植えが適すと考えられました。

4. おわりに

無摘心栽培では栽培期間が短いうえ、病害による枯死株等の問題発生は減少するというメリットに加え、開花が揃うため、冬季から春季の需要期を狙った栽培が可能となります。

ただし栽培時期により品種の適不適があると考えられるので、今後検討を行う予定です。

（園芸部 上山茂文）

表1 栽植密度が切り花品質に及ぼす影響

試験区	切り花	切り	切り花	節数	分枝数	花数**	
品種	栽植密度* (条)	日 (月.日)	花長 (cm)	重 (g)		(個)	
ブルー グラウンド	4	4.1	112.0	95.2	20.7	12.0	91.8
	5	3.29	105.6	65.0	20.0	10.6	77.0
	6	3.31	102.2	43.9	21.6	8.6	65.5
ブルー スパイヤー	4	3.22	125.8	100.9	19.4	10.7	24.5
	5	3.24	121.4	64.8	19.4	7.0	5.3
	6	3.25	115.1	43.4	21.9	5.3	24.0

注) 育苗は200穴セル成型トレイで50日育苗、定植は12月20日、加温温度13℃、日長は16時間日長

*4条（株間20cm×条間20cm）、5条（株間15cm×条間15cm）、6条（株間12cm×条間12cm）

**切り花時の着色小花らい数、ブルーグラウンドは分枝の小花も調査